

まだまだ暑い日が続く中、ジリジリと焦がすような太陽の光が地面を刺す。太陽が頭上まで昇る頃にはアスファルトの地面からは燃えるような暑さを感じる。

これでは自慢の肉球が焦げてしまうではないか、などと考えながらひなたを避け、なるべく日陰を通りながら歩く。

歩くこと数分、目的地である真っ赤な屋根の家が見えた。白いカーテンの向こうにはグレーの毛にエメラルドグリーンの瞳を持った彼女。

急いで扉を登り、丹念にグルーミングをしてからにゃあ、とひと鳴き。するとチリン、と首に付いた鈴が綺麗な音を鳴らしながら彼女は振り向いた。

「今日も来てくれたんだね」

そう言いながらカーテンをくぐり僕のほうへ歩いて来た。

「今日はどんな話を聞かせてくれるの？」

前来た時はカラスと対決した話だったよね」

君の話を聞くのが毎日の楽しみなんだ、僕は外に出してもらえないから。と言い俺とは正反対の綺麗なしっぽをゆらゆら揺らしながら話す。

僕、と言っているが彼女は女の子だ。俺が来るようになるまでは外のことなど知りもしなかった彼女の世界は飼い主しかいない。そのため一人称がうつつたらしい。

「女は普通『私』と言うんだぞ」

と前に言ったら

「えっ、そうなの？」

と、しっぽとひげをピンと立てて驚いていた。

そんな彼女には俺からは普通のことではしか無いことがまるで大冒険をしているかのように聞こえるらしい。

なので、こうして彼女の飼い主が家を留守にしている昼から夕方にかけて話をしに来ているのだ。彼女はいつも俺の話を大きなエメラルドグリーンの瞳をキラキラと輝かせながら聞いてくれる。少しオーバーに俺も自分のことを話す人はみな自分の自慢話をするときは二割か三割は話を盛るものだ。それは猫も変わらない。

「今日はな、いいものを持ってきたんだ」

「いいもの？」

「ああ」

ちよっと待ってね、と彼女は言って前足を器用に使い鍵を外し窓を開けた。

俺は家の中に少し入り、後ろに隠していたものを彼女の目の前に出す。

「なにこれ……」

「なにつて、ネズミだが」

ねずみ、ねずみ、ぶつぶつ呟きながら俺が狩って来たネズミをまじまじと見つめる。

「もしかして、ネズミを見るのは初めてか？」

彼女はネズミに向けていた視線をあげこちらを見て頷いた。

「うん、初めて見たよ、これどうするものなの？」

「食べるんだ」

「え、食べるの」

彼女が驚くのもおかしくはないか、と家の中を見て思う。家の中は綺麗に掃除されておりネズミが好みそうな場所などない。それに彼女のご飯はキャットフードというものだ。以前、美味しいのかと尋ねたところ少し貰ったのだがどうも俺の口には合わなかった。やはり生粋の野良ねこには高いご飯は合わないのか……

「ほんと、外の世界っておもしろいね！」

彼女の声に考えていたことを止めそちらを見た。

「本当に君には感謝してるんだよ、だって僕には見ることが出来ない世界を君はいつも教えてくれる。今まで僕の世界はご主人だけだったけど、君が来てくれたから僕の世界が広がったんだ。君が僕のもうひとつの世界なんだ。」

そう言いながら彼女は自分のしっぽを俺のしっぽにピタ、とひつつけた。

「お前……。他のオスにはこんなことするなよ……」

「え、なんで？ ていうか僕に君以外の友達がいると思うの？ 君にしかこんなことしないよ」

彼女の言葉に頬が真っ赤になる。見られたくないとフイツと顔を背けた。

「どうしたのさ。ねえ、おーい、おおーい！」

呼びかけに答えずに外へ出て扉に飛ぶ。

「きよ、今日はもう遅いからな、それにもう飼い主も帰ってくるだろう、だ、から俺は帰る」

ああ、噛みすぎだぞ俺……と思いつつ見ると、彼女はニタリと笑う。

(こいつ、確信犯かつ)

さらに顔を赤くし、いつの間にこんな事を覚えたんだ、ともんもんと考えているとねえ、と声をかけられた。

顔をあげるとさつきとは違うかわいらしく微笑む彼女の顔。

「明日も楽しみに待ってるからね」

「ああ！」

明日は何を話そうか、そう考えを巡らせながらトンツと扉を蹴った。

(あ、これ【ネズミ】持って帰って、いらぬ)

(あ……、ああ、すまぬ)